



Title	満洲語学の展開 : 池上先生の残したもの
Author(s)	津曲, 敏郎
Citation	北方人文研究, 5, 173-178
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49303
Type	bulletin (other)
Note	シンポジウム報告
File Information	12journal05-tsumagari.pdf



[Instructions for use](#)

〈シンポジウム報告〉

満洲語学の展開：池上先生の残したもの

津曲敏郎

北海道大学大学院文学研究科

0. はじめに：池上先生の北方言語研究

本稿では池上先生の満洲語学における主な功績を紹介し、今後の研究の課題を展望したい。

満洲語学を含め、先生の北方言語研究には大きく次の4つの柱を認めることができる（丸付き数字で先生の5冊の市販著書との対応を示す）：

- (1) 満洲語学 ②, ④
- (2) ウイルタ語学 ①, ③, ④
- (3) 他のツングース諸語および比較研究 ③, ④
- (4) 北方諸言語（アイヌ語、古アジア諸語、アルタイ諸語）および日本語との関係 ⑤

＊池上二良 著書

- ①1997『ウイルタ語辞典』北海道大学図書刊行会。〔書評：津曲 1997〕
- ②1999『満洲語研究』汲古書院。〔書評：津曲 2000〕
- ③2001『ツングース語研究』汲古書院。
- ④2002『ツングース・満洲諸語資料訳解』北海道大学図書刊行会。
- ⑤2004『北方言語叢考』北海道大学図書刊行会。〔書評：津曲 2006〕

先生は1920年のお生まれであり、これらの著書はいずれも喜寿を過ぎてから1,2年おきに出版されたことになる。基本的にそれまでの研究資料・論文の再録によっているとはいえ、すべてご自身による入念な補訂作業を経ており、その学問的情熱には頭の下がる思いである。満洲語学に関する業績は著書②『満洲語研究』にまとめられているが、④『資料訳解』にもいくつかの満洲語文献のローマ字化テキストと対訳が収められている。

1. 池上先生と満洲語学

(1) 同時代の満洲語学

池上先生がツングース・満洲諸語の研究を志した1940年代当時、生きたツングース語の口語にふれることは事実上不可能な状況にあり、利用できる文献も満洲語以外には限られていた。そこで文献資料による満洲語研究を「当面の」課題としたのである（津曲 1994 も参照）。先生の満洲語研究は出発点から口語を志向していて、文語の枠にとどまらないものであり、さらに満洲語学の枠にもとどまらないものであった。このような視点は山本（1955）、上原（1960）ら同時代の満洲語学者にはなかったものであり、概して満洲語文語の共時的記述にとどまっていた（当時の数少ない満洲語口語の情報として、河野 1944）。他の基本的な辞書作成（羽田 1937）や対訳テキスト（今西 1938、満文老檔研究会 1955, 56, 58, 59, 61, 62, 63 など）では、むしろ東洋史学者が伝統的に貢献してきた経緯がある。実は満洲語学をめぐる、このような状況は今日に至るまであまり大きく変わってはいない。

(2) 『満洲語研究』（池上 1999）

本書に1946年（以下の論文7）以後の満洲語に関する著作が再録・集成されているので、以下この著書から音韻、文法、語彙の各分野における主要論文を紹介する（初出については同書を参照されたい。また書評として津曲 2000 があり、以下の記述もこれと重複する部分がある

ある)。収録論文は書評等も含む以下23編である：

- 1 満洲語の諺文文献に関する一報告／2 ふたたび満洲語の諺文文献について／3 満洲語研究における朝鮮字文献の重要性（英文）／4 満漢字清文啓蒙に於ける満洲語音韻の考察／5 満漢字清文啓蒙に於ける満洲字とその表音漢字および転写ローマ字の一覧表／6 満洲語に於ける二つの母音変化について（独文）／7 満洲語の若干の文語形中の \bar{u} の表す母音に就いて／8 満洲字 dz について／9 Tongki Fuka Akū Hergen i Bithe とそのウランバートル刊本／10 満洲語文語の正書法の沿革—特に o, u, \bar{u} について／11 語学資料としての旧満洲檔—漢語音の表記について—／12 満洲語の動詞語尾-ci 及び-cibe について／13 満洲語動詞の若干の不規則命令形の由来について（独文）／14 満洲語の縦走的意味の deri（英文）／15 満洲語動詞の直説形—ツングース語動詞のそれと比較して（英文）／16 漢語「遊牧」と満洲語その他のアルタイ諸語／17 アムール川下流地方と松花江地方—「満洲」の語源にふれて—／18 満洲語方言研究における穆曄駿氏採集資料について／19 満洲語とツングース語—その構造上の相違点と蒙古語の影響—／20 ヨーロッパにある満洲語文献について／21 ハウエル著「満独辞典」について（書評）／22 E.ヘーニッシュ著「満洲文史料」（書評）／23 満洲語史概略。

上にもふれた先生独自の、満洲語をツングース語の一つとして歴史的にとらえる視点が、「はしがき」で端的に述べられている：

「本書は、著者がツングース・満洲語の研究に入ってから、特に満洲語について発表した拙文をまとめ、さらに一部を書き改めたり、追記を加えたりしたものである。著者は、これらの言語について考えるとき、その歴史・過去の変遷を視野に入れるのが常であった。そしてまた、満洲語は単独の言語としてみるよりも、ツングース・満洲諸語の一つとしてみる視点に立ってきた。それによって、従来気づかれなかった点をあきらかにし、新しい知見をうることに役立つように思われる」（池上1999: i）

2. 音韻研究

(1) 朝鮮字文献『漢清文鑑』等による研究（論文1, 2）

口語としての満洲語への関心から、池上先生の満洲語研究では当然、音韻研究が大きな比重を占める。上記著書でも収録論文の約半数（ページにして6割強）が音韻に関する研究である。研究の初期の段階で満文に対する朝鮮字転写に注目し、 uwa および uwe の転写にはそれぞれ二通りあって（ uwa に対しては朝鮮字① ua または② $u'oa$ ； uwe に対しては朝鮮字① ue または② $u'ue$ ）、そのどちらを含むかは語によって大体決まっていることに気づいた（例① $juwan$ 「十」、 $juwembi$ 「運送する」；② $juwari$ 「夏」、 $juwe$ 「二」）。そこで朝鮮司訳院刊の『漢清文鑑』について、その見出し語すべてを調査した結果、ツングース語の単語との音韻対応などに照らしてみても、 uwa および uwe のそれぞれの二種の朝鮮字転写は満洲語の音韻的差異を反映しているとの結論に達した（①は1音節をなす二重母音、②は子音を挟む2音節）。これを第一項とし、他の満洲語朝鮮字転写の問題とあわせて執筆したのが、第1論文「満洲語諺文文献に関する一報告」である。その第二項では満洲字の表わす母音 \bar{u} について、これを語頭にもつ単語では $[ö]$ であることを述べ、第三項では満洲字 io, eo 中の o が、これを含むそれぞれの語において朝鮮字 o または u で表わされるのは母音調和によることを論じている。なお、この論文にも見られるように、過去の言語の音価を知るうえで、外国人や外国の文字による記録が重要であることを、池上先生は折に触れおっしゃっていた。

(2) 『満漢字清文啓蒙』による研究（論文4, 5, 6）

論文4は、『満漢字清文啓蒙』における漢字表記をもとに満洲語音韻を考察したもの。東

京帝国大学文学部の卒業論文として1944年に提出されたが、発表は1986-87年。論文6は論文4の一部(第31, 40節)をドイツ語で発表したもの。同書第1巻中の「異施清字」の条の記述をもとに、いわゆる「iの折れ」(niru>niuru「矢」など)と、第2音節のiの先取り現象(damin>daimin「驚」など)が満洲語口語で起きたとみられることを論じた。

3. 文法研究

(1) 動詞語尾-ci と-cibe (論文12)

条件形動詞語尾 -ci「すれば」、-cibe「しても」の意味・用法を検討し、ツングース諸語との比較から-ciは*-rakiに(cf. 満 c<*rk: ice「新しい」、uce「戸口」|エヴェンキ irkekin, urke)、-cibeはそれに*-belが接尾したものに由来すると論じている。

(2) 不規則命令形 (論文13)

満洲語では動詞語幹(語尾ゼロ)による命令形が一般的であるが、かつてはナーナイ語やウイльта語と基本的に一致するような動詞命令形の活用方式を有していて、今日の不規則命令形(dosi-nu「入れ」、je-fu「食べろ」、ji-o「来い」、bi-su「あれ、いろ」など)はこの方式による形が残ったものであるとの見解を述べている。この例に見るように、不規則形は往々にして古い形を保存している、ということも先生が一般論として言及されていたことの一つである。なお、満洲語における無語尾命令形の発展については、以下の論文19でもあらたな角度から取り上げられる。

(3) 沿格語尾-deri (論文14)

名詞語尾 deri について、文献によっては名詞と deri の間に属格語尾 i が介在する例があることなど文法的用法を考察し、伊犁方言(シベ語)の deri の用法拡大にふれ、その由来について述べた。

(4) 直説法語尾の体系 (論文15)

満洲語動詞の直説形(終止形)の体系をツングース諸語との比較を通して論じたもの。

(5) モンゴル語の影響による文法変容 (論文19)

満洲語が他のツングース諸語に対してもつ文法上の特異性のいくつか(格組織、無語尾命令形、動詞否定構造など)が、モンゴル語との言語接触による結果であるとする注目すべき見解を示した。類型論的な比較に基づきながらも、歴史的な裏付けをゆるがせにしない姿勢がうかがえる。

4. 語彙研究

(1) 「游牧」を表わす語 (論文16)

漢語「游牧」に対して、意味上それに相当ないし類似する満洲語 nuktembi やその他のアルタイ諸語の単語は、元来「牧畜」の意味を含まず、単に「移動」の意味であることを指摘し、漢語「游牧」との相違は、それらの言語の話し手の生活形態の違いに起因すると述べたものである。言語の問題が民族の文化や歴史と切り離せないことを示した。

(2) manju「満洲」の語源 (論文17)

満洲語 manju「満洲」について、オロチ語、ネギダル語などの mangu「(アムール)川」の語と同源とみるロシアの ツィンツィウス(V. I. Tsintsius)教授の旧説を修正補強し、あらためてこの説の成立の可能性を明確にしている。語源や借用語の研究は上記の著書⑤で、より広範な視点から展開されているが、その厳密な実証的態度には敬服のほかない。

5. 現状と課題

(1) コーパスによる用例研究

1980年代後半から、パソコンの普及にともない、満洲語研究はあらたな段階を迎えた。すなわち文語テキストを電子データ化することで、大量のテキスト・コーパスからの検索に基づく実証的な文法・語義研究が行われるようになった（その経緯については、早田 1997）。満洲語は一定の方式でのローマ字化が容易であり、大量の文献資料を有する点でもコーパス化が有効である。また日本語と似た統語法であることも、対訳付きでのテキスト化を容易にする。これからの満洲語学（とくに文語研究）はコーパスの利用ぬきには語れないとも言えよう。ただし、現状ではこうしたコーパスがおおむね研究者個人レベルでの作成・利用にとどまっており、公開・共有という点が今後の課題である。いずれにしても池上先生時代の、文献の丹念な読み込みによる知識・経験の蓄積と問題発見のプロセスが短縮できるようになったわけではもちろんない。電子コーパスによる満洲語研究を積極的に推進している早田氏自身が次のように述べている。「テキストを読んでいるうちに或るアイデアが浮かび、それを検証したり、一層深く掘り下げたりするために、パソコンやデータベースが利用されるのである」（早田 1997:84）。

(2) 新たな文典

90年代以後、内外から満洲語学習用の文法書や読本類が出されている（河内 1996, 津曲 2002, 河内・清瀬 2002; Avrorin 2000, Li 2000, Gorelova 2002）。多くは満洲語文献を読み解くことに主眼がおかれており、言語学の観点からの記述文法、あるいは上記コーパスによる用例研究をも踏まえた参照文法と言えるようなものはまだ少なく、今後の課題の一つである。

(3) 口語の研究と記録

シベ語を含む口語についても内外から情報が得られるようになったとはいえ、まだ十分ではない（恩和巴図 1995; Kim et al. 2008; 児倉 2007, 久保ほか 2011ab）。とくにシベ語の場合、話者人口はツングース語としては少なくないにもかかわらず、音声資料に基づくテキストがきわめて少ないのは、事実上満洲語文語とさほど変わらない文語をもつことがむしろあだになっていると言える。

(4) ツングース諸語との歴史的／類型的比較研究

この点こそ池上先生が力をそそいだところであるが、残念ながら満洲語学がその枠内にとどまりがちな傾向は、今もあまり変わらないように思われる。池上先生の時代に比べると、利用できるツングース諸語の資料も飛躍的に増えており、今後の展開が期待される分野である。

(5) 中国・ロシアの連携／相互参照

最後にツングース・満洲諸語研究全体の問題として、その主要な分布域であるロシアと中国における研究が、いまだに相互に十分参照されていないことをあげなければならない（この点は津曲 1996でも指摘した）。すなわち中国の研究者はロシア語（さらに広くは欧米の言語および日本語を含む外国語）による研究文献を参照せず、逆にロシア（ならびに欧米）の研究者にとって中国語はおろか漢字が鬼門となっている（もちろん日本語文献も利用できない）というケースが少なくない。こうした点で日本人研究者の役割は重要であるが、両方の資料を利用するだけでなく、みずからの研究成果を英語で発信するなどの努力がいっそう必要であろう。池上先生はツングース・満洲語学の国際化をはかるという点でも、身をもってお手本を示してくれたように思われる。

参考文献

羽田 亨

1937『満和辞典』京都（復刻 1972 国書刊行会，東京）。

早田輝洋

1997「パソコンによる満洲語文献データ処理」『アジア・アフリカ文法研究』25:83-94, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

今西春秋

1938『満和对訳 満洲実録』京都.

河内良弘

1996『満洲語文語文典』京都大学学術出版会.

河内良弘・清瀬義三郎則府

2002『満洲語文語入門』京都大学学術出版会.

児倉徳和

2007「シベ語（満洲語口語）」中山俊秀・山越康裕（編）『文法を描く：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』2:131-157. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

河野六郎

1944「満洲国黒河地方に於ける満洲語の一特色」『学叢』3:190-215. 京城帝国大学文学会.

久保智之・児倉徳和・庄声

2011a『シベ語の基礎』（2011年度言語研修シベ語テキスト1）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

2011b『シベ語語彙集』（2011年度言語研修シベ語テキスト2）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

満文老檔研究会

1955, 56, 58, 59, 61, 62, 63『満文老檔』I-III(太祖 1-3), IV-VII(太宗 1-4), 東洋文庫.

津曲敏郎

1994「満学家池上二良教授」閻崇年（主編，北京社会科学院満学研究所）『満学研究』2:385-390, 北京：民族出版社. [中国文，宣徳五訳]

1996「中国・ロシアのツングース諸語」『言語研究』110:177-191.

1997「書評 池上二良編『ウイльта語辞典』」『言語研究』112: 132-143.

2000「書評 池上二良著『満洲語研究』」『満族史研究通信』9:130-134, 東洋文庫清代史研究室満族史研究会.

2002『満洲語入門 20 講』大学書林.

2006「書評 池上二良『北方言語叢考』」『満族史研究』5:165-169, 東洋文庫清代史研究室満族史研究会.

上原 久

1960『満文満洲実録の研究』不昧堂.

山本謙吾

1955「満洲語文語形態論」市河三喜・服部四郎(編)『世界言語概説』下巻，研究社. [同書に池上「トゥングース語」（満洲語の書誌、文字等を含む：その一部は池上 1999にも再録）]

恩和巴图

1995 『満語口語研究』 内蒙古大学出版社.

Avrorin, B. A.

2000 *Grammtika man'chzhurskogo pis'mennogo jazyka*. Nauka.

Gorelova, Liliya M.

2002 *Manchu grammar*. Brill.

Kim, Juwon, D. Ko, D. O. Chaoke, Y. Han, L. Piao and B.V. Boldyrev

2008 *Materials of spoken Manchu*. Seoul National University press.

Li, Gertraude Roth

2000 *Manchu: a textbook for reading documents*. University of Hawai'i Press.

Manchu Linguistics by Prof. Ikegami

Toshiro TSUMAGARI

Graduate School of Letters, Hokkaido University

0. Northern language studies by Prof. Ikegami

(1) Linguistic study in Manchu (2) Linguistic study in Uilta (3) Other Tungusic languages and their comparative studies (4) Northern languages including Ainu, Paleoasiatic and Altaic, and their relation to Japanese

1. Prof. Ikegami and Manchu linguistics

(1) Contemporary Manchu studies (2) *Researches on the Manchu Language* (Ikegami 1999)

2. Phonological studies

(1) Studies on Korean materials (2) Studies on *Qing-wen-qi-meng*

3. Grammatical studies

(1) Verb ending *-ci* and *-cibe* (2) Irregular imperatives (3) Prolative ending *-deri* (4) Indicative forms (5) Mongolian influence in Manchu grammar

4. Lexical studies

(1) Expressions referring to nomadism (2) Etymology of the word *manju* 'Manchu'

5. Current situation and problems

(1) Corpus-based study (2) Modern grammars (3) Studies and documentation of spoken Manchu (4) Historical/typological comparison with other Tungusic languages (5) Cooperation and cross-reference between China and Russia